

総合開館 20 周年記念

山崎博 計画と偶然

YAMAZAKI HIROSHI/CONCEPTS AND INCIDENTS: A RETROSPECTIVE FROM THE LATE SIXTIES ON WARDS

2017年3月7日(火)～5月10日(水)



〈CRITICAL LANDSCAPE〉より
1985年 作家蔵

東京都写真美術館では、写真・映像を「時間と光」というエッセンスによって捉え、1960年代末より活躍してきた山崎博(1946-)の仕事をつとめる、公立美術館で初めての展覧会を開催します。長時間露光によって太陽の光跡を視覚化した〈HELIOGRAPHY〉をはじめ、〈水平線採集〉や〈桜〉のシリーズなど代表的な写真作品と、作家が写真と平行して追求してきた映像作品、さらに新作を含む約200点によって、現代のコンセプチュアルな写真・映像の先駆者・山崎博の歩みを今日的な視点から通覧します。

山崎の作品は光の現象のもつ無限の豊潤さや時の流れを感じさせます。作家はつねに一定の枠組みや単純化された方法論をとりながら、「太陽」、「海」、「桜」といった普遍的なものに一貫して取り組んできました。その作品は、対象と装置、被写体とイメージの関係性を示唆するとともに、光の表現の豊かさや静謐で美的なクオリティを獲得しています。

70年代の初め、山崎は「いい被写体を探して撮る」ことへの疑いから、「被写体を選ばずに撮る」ことを模索し、自宅の窓のような制約のある風景、特徴のない単純な海景といった「与えられた枠組み」の中で方法的な探求を行うスタイルに行き着きました。計画性にもとづく制作と、写真行為の中で起こる偶然性はその作品の大きな特質になっています。作家は「計画がなければ偶然もない」と言います。「計画と偶然」の二つの要素が相互に作用することで、山崎博の作品は成立しているのです。

本展は45年以上のキャリアにおよぶ作家の主な作品シリーズを通して、その表現世界の本質に触れる試みです。

主な出品予定作品 出品点数 約 200 点

〈EARLY WORKS〉



〈EARLY WORKS〉より 〈山下洋輔〉
1973年 東京都写真美術館蔵

写真家として活動し始めた時期の初期作品シリーズ。寺山修司、土方巽、赤瀬川原平、栗津潔らのポートレートや当時の前衛芸術の現場をとらえたドキュメンタリーとともに、独自の写真表現を確立していくまでの軌跡をうかがうことができる。

〈OBSERVATION 観測概念〉



〈OBSERVATION 観測概念〉より
1974年 東京都写真美術館蔵

山崎が作家としての方向性や、後年まで続く自身のスタイルを見いだしたのは、1974年の個展で発表した連作風景だった。本作では調布市にあった自宅の窓からの眺めを撮影している。その被写体と構図は撮影のために自ら選んだものではなく、たまたま「与えられた風景」であり、それは「被写体を探して撮る」ことの否定、作為性を排した自身の新たな写真行為の実践であった。掌を画面に入れ込んで、風景とカメラの間に自身の行為を介入させる試みも行っており、「与えられた風景」を写すことにどれだけ多様な方法論が取りうるかの実験として見ることができる。

限定された方法（コンセプト）とは、決して不自由な方法を意味せず、シャープな方向性を確保するための装置であるのだろう。そのようにとらえれば、写真はコンセプトに従属せず、コンセプトは写真に奉仕する。

（『TEMPORARY SPACE #26 HIROSHI YAMAZAKI 櫻-EQUIVALENT』TEMPORARY SPACE 編、1993年より）

山崎はコンセプトを写真のための「装置」と見なしており、いわゆるコンセプチュアル系の美術家がコンセプトの掲示のために写真を用いるスタンスとは全く異なっている。

〈HELIOGRAPHY〉

このような『光の画』に対する想像力をかきたてるような、美しい名前を我々は、今持っているだろうか。写真に対する素直な感受性を、今持っているだろうか。風景を定着することなど“朝メシ前”になっている我々には、光や写真や、海や風や、時間や、要するに風景と写真に対する感覚と思考が風化しているのだろうか、などと思う。

(出典不詳、作家所蔵の掲載誌スクラップブック所収。掲載作品《日没時の普通撮影》とともに「作者から afternoon」と題された掲載文章より。70年代後半頃の雑誌と見られる。)



〈海をまねる太陽〉より1978年 東京都写真美術館蔵

〈OBSERVATION 観測概念〉の一連の試みの延長線上にあり、作家の写真思想を最も端的に示しているシリーズ。水平線上にある太陽をある時間的な広がりの中でカメラに捉え、そこにおこる光の現象をイメージとして定着させた。映画《HELIOGRAPHY》では太陽の動きを日没から日の出まで、ずっと同じ位置で捉えるというコンセプトで制作されている。

〈水平線採集〉



左) 〈水平線採集〉より1994年 作家蔵 右) 〈水平線採集〉より《鶴沼海岸》1981年 作家蔵

「カメラを水平に構える」というルールを決めることで、「フレームのセンターラインが水平線になり、それ以外の構図がとれなくなってしまう」制約が生まれる。そのプリミティブな構図で撮影されたシリーズ。「可視でき、映像化され、概念化されている水平線は『物』としては“非在”である」と作家は言う。

〈CRITICAL LANDSCAPE〉



表紙図版 〈CRITICAL LANDSCAPE〉より 1985年 作家蔵

1985～89年まで現代思想を扱う季刊誌『クリティーク』の表紙（表裏の両面）として発表されたシリーズ。山崎は写真と合わせて、各回の特集テーマに緩やかに関連しつつ「表紙の言葉」と題した散文を発表した。このシリーズでは、10か所の場所から同時刻に太陽を写す行為を2日間にわたって行うプランや、レーザー光線を照射した物体を撮影する試みなど様々な展開がなされている。左の作品では、太陽の軌跡が「計画」した部分、鉄塔の反射が「偶然」の部分となっており、本展タイトルを象徴する作品である。

〈櫻〉



左) 〈櫻〉より 1989年 東京都写真美術館蔵 右) 〈櫻花図〉より 2001年 東京都写真美術館蔵

1日の時間の推移の中で、太陽と桜とカメラの位置関係を固定的な枠組みとして、太陽の動きにあわせて移動する方法で撮影した長時間露光の写真シリーズ。山崎は既存の桜のイメージを映像化するのではなく、「桜を地上から切り放して、桜に天空の光を見せてやろう」と考え、「本来のカメラの原理がストレートに写す桜」のイメージをもとめた。櫻（1990年）では、ズームレンズに4個のテレコンバーターをセットした超望遠レンズによって、太陽を背後とする桜を撮影している。1989年のビデオ作品からはじまる本シリーズは《櫻 EQUIVQLENT》（1993年）、《櫻 EQUIVQLENT ON COLOR》（1995年）へと発展した。

〈水のフォトグラム〉



〈Untitled (水のフォトグラム)〉より 2017年 作家蔵

作家が本展のために制作した新作。1975年の同タイトルのバリエーション。暗室の中でストロボを光源として、水の流れと光の揺らめきが作り出す不確定な模様を印画紙上に写し取った。そのイメージは掌によって風景とカメラの間に自身の行為を介在させた最初の作品《OBSERVATION 観測概念》（1974年）とも呼応して、展覧会の始まりと終わりがつながっていくようである。

せせらぎに、身を添わせるようにしてカメラを水面にちかづけていく。ファインダーの内の水を飽くことなく眺めつづける。これは、流れている水を見ているのだろうか、水面は反射し、たえず揺らめく光を見つめているのだろうか。どちらにせよ、ここには、“決定的瞬間”などという見る側のヒエラルキーは存在しない。

(『TEMPORARY SPACE #26 HIROSHI YAMAZAKI 櫻-EQUIVALENT』TEMPORARY SPACE 編、1993年より)

山崎 博 YAMAZAKI Hiroshi

1946年長野県生まれ。1968年日本大学芸術学部を中退。1969年から本格的に写真を始め、1972年より平行して映画フィルムによる作品制作を始める。1983年長時間露光による太陽のシリーズで第33回日本写真協会新人賞を受賞。2001年第26回伊奈信男賞を受賞。東京造形大学講師、東北芸術工科大学教授を経て2005年から武蔵野美術大学教授(2017年3月まで)。1974年個展「OBSERVATION」(ギャラリー・グラフィカ、東京)以降、ニコンサロン他での個展、グループ展多数。

主な著書『HELIOGRAPHY』(青弓社、1983年)『水平線採集』(六曜社、1989年)他。

関連イベント

対談「山崎博をめぐって」

日 時 2017年3月25日(土)

北野謙(写真家)×石田哲朗(東京都写真美術館学芸員)

2017年4月16日(日)

金子隆一(写真史家)×石田哲朗(同上)

各 回 14:00-15:30

定 員 各回50名

会 場 東京都写真美術館 1階スタジオ

※当日午前10時より1階総合受付にて整理券を配布します。

※各回とも作家本人の出演予定はございません。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2、第4金曜日14:00より、担当学芸員による展示解説を行います。

展覧会チケット(当日消印)をご持参のうえ、2階展示室入口にお集まりください。

展覧会図録

東京都写真美術館編集 武蔵野美術大学出版局発行 A4版 192頁 価格未定

光田ゆり(美術評論家)、北野謙(写真家)、石田哲朗(東京都写真美術館学芸員)による執筆のほか、主な出品作品図版、サムネイル付きの出品作品リスト、作家略歴、ビブリオグラフィーを掲載予定。

開催概要

主催 東京都 東京都写真美術館／読売新聞／美術館連絡協議会
協賛 ライオン／大日本印刷／損保ジャパン日本興亜／日本テレビ放送網
会期 平成 29 (2017) 年 3 月 7 日 (火) ～5 月 10 日 (水)
会場 東京都写真美術館 2 階展示室
東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>
開館時間 10:00～18:00 (木・金は 20:00 まで) 入館は閉館 30 分前まで
休館日 毎週月曜日 (月曜日が祝日の場合は、翌火曜日が休館。ただし 5/1 は開館します)
観覧料 一般 600(480)円／学生 500(400)円／中高生・65 歳以上 400(320)円
※ () は 20 名以上の団体料金 ※小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳
をお持ちの方とその介護者は無料 ※第 3 水曜日は 65 歳以上無料

このリリースのお問い合わせ先

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan
Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>
展覧会担当 石田哲朗 t.ishida@topmuseum.jp 伊藤貴弘 t.ito@topmuseum.jp
広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp